

# しろや！ 広島城



No.68

連歌百韻奉納400年記念

## 浅野長晟の趣味探訪～連歌と天神信仰～

### 三代目城主・浅野長晟

みなさんは、広島城の城主というと、誰を思い浮かべますか？ 築城主である初代城主・毛利輝元、関ヶ原合戦の後に城主となった二代目城主・福島正則あたりが有名所でしょうか。

さて、今回の主役は三代目城主にあたる、浅野長晟です。まずは、簡単に長晟のプロフィールをご紹介しますと思います。浅野長晟は、天正14年(1586)に、浅野長政の次男として近江坂本(滋賀県大津市)で生まれました。はじめ豊臣秀吉に仕えますが、関ヶ原合戦では徳川家康くみに与しました。慶長15年(1610)に備中足守あしもり(岡山市北区)に2万4000石を与えられますが、慶長18年(1613)、長兄の幸長よしながの病死をうけて家督を相続し、紀伊和歌山藩37万石の藩主となりました。その後、元和5年(1619)、福島正則が改易されると、安芸一国備後八郡42万6500石を与えられ、広島城に入ります。



浅野長晟画像(模写) 広島城所蔵

長晟の後、廃藩置県に至るまでの約250年間、12代にわたり、浅野家が広島藩主を務めました。実は、江戸時代の広島は、その大半が浅野家の治世だったのです。しかしながら、浅野家の藩主たちに関する研究は決して多くはなく、なかなか個々の人物像にまで迫ることはできていませんでした。広島浅野家の初代・浅野長晟は、一体どんな人物だったのでしょうか？

ちなみに、二代目城主である福島正則は、福岡県の民謡『黒田節』にうたわれるように、人間味を感じさせる(とくにお酒にまつわる)エピソードが知られています。きっと、長晟にも好きな物や趣味があって、仲の良いお友達がいたに違いありません。ここからは、長晟の知られざる一面を紐解いていきたいと思います。

### 浅野長晟入城と天神坊

まず手がかりになるのは、江戸時代後期に編纂された広島城下の地誌『知新集』の記述です。長晟は、和歌山から海路で広島に向かい、到着したのは元和5年8月8日のことと伝えられています。『知新集』「満松院」の項には、「自得院殿まんしょういん(浅野長晟)御入国の時御船よりすくに当院へ御入あり」とあり、船を降りた後、城へ向かう道中で満松院に立ち寄り、休憩をとったことがうかがえます。

満松院は真言宗の寺院ですが、古くは境内にあった天神社から、「天神坊」と呼ばれていました(以下、引用をのぞいて満松院は「天神坊」と表記します)。明治時代までの日本は神仏習合でしたので、お寺の中に神様を祀っていたり、社務を僧侶が

執ったり、ということが一般的に行われていました。

ご存知の通り、天神社や天満宮と呼ばれる社は、菅原道真を神様として祀っています。京都の北野天満宮や福岡の太宰府天満宮などが有名で、天神信仰の広がりとともに、各地につくられるようになりました。天神坊境内にあった天神社は、広島城築城の頃に、毛利輝元により高田郡吉田(広島県安芸高田市)の天神山から広島城下へ遷されたと伝えられます。福島正則の時代には社地を没収され衰退しますが、長晟入城時の縁により浅野家から厚く信仰され、再び社勢を取り戻しました。その後、江戸時代には享保13年(1728)と寛政7年(1795)の2度の火災に見舞われましたが、いずれも浅野家の寄進を受けて再建されており、その崇敬ぶりがよくわかります。



現在の天神坊(天満神社)

ちなみに、天神坊の場所は、現在の広島市中区中島町にあたります。もともとこの辺りは「船町」と呼ばれていましたが、17世紀の半ばには「天神町」に改称されたようで、その後戦前までこの町名が使われていました。『広島市史 社寺誌』「天神町天満宮」の項によると、大正時代には200坪を超える社地を有していたようですが、現在は「天満神社」の名前で、平和記念公園の南側、土谷総合病院の裏手にひっそりと祀られています。長晟入城から間もない頃の城下の様子を描いたとされる「寛永年間広島城下図」(広島城所蔵)には、現在とほぼ同じ位置に「天神」の記載が見られます。

### 浅野家の連歌百韻奉納

さて、先述の入国の際の話に続いて、『知新集』

には、こんな記述があります。「此殿(長晟)なん連歌を好ませ給ひけれハ、常に御城におゐて連歌御興行ありける」、つまり、長晟は連歌が大好きで、お城でもいつも連歌の会を催していた、というのです。これだけでも連歌好きであることはわかるのですが、『知新集』には、さらに続きがあります。それによれば、周防国の寿全というお坊さんが広島に逗留していました。寿全は連歌が堪能だったので長晟にたいへん気に入られ、度々召されては共に連歌を詠んでいたようです。そればかりか、寿全は長晟から天神坊の住持として社務を執るよう命じられ、結果的に天神坊の中興となった、ということです。

元和7年(1621)正月には、長晟により御連歌百韻が天神坊に奉納されており、この発句(最初の五七五)は長晟、脇句(続く七七)は長晟の嫡男・岩松丸(のちの浅野光晟)でした。『知新集』には、「元和七年正月七日 / 賦千何連歌 / 万代をかけて子日の小松哉 長晟 / なへて野山も長閑なる空 岩松丸」と、長晟と光晟の句が書き留められています。ちなみにこの時、光晟はわずか数え歳で4歳でした。実際に光晟本人が句を詠んだかはさておいて、お父さんによる連歌の英才教育のようすがうかがえます。なお、奉納された連歌が記された懐紙は、社の宝物となりました(ただし、2折を残して享保13年に焼失)。これ以後、天神坊では、長晟の命により御祈禱連歌を毎月興行することとなります。その後、寿全が老年になり周防国に帰国すると、弟子の増実が住持を引き継ぎました。増実も同じく連歌を能くし、天神坊は長晟、光晟の二代にわたり、厚く信仰されました。

このように、わざわざ連歌上手のお坊さんを城下に住まわせてお寺を与えたり、年端も行かない息子と連歌を詠んで奉納してみたり、毎月連歌会を開くように命じたり…。連歌に対して長晟がかけているコストと情熱はなかなかのものだな、と感じるのは私だけでしょうか…?

### 連歌師による天満宮遷座

連歌は、複数の人々が一座に会して句を詠み継いでゆく形式の文芸で、一人が五七五の句を詠む

と、その句を前句として別の人間が七七を付けることを繰り返し、五十句・百句続けていくものをそれぞれ五十韻・百韻連歌と呼びます。鎌倉時代に成立し、南北朝から室町時代にかけて流行しました。戦国時代から近世にかけても、連歌は武将にとって必須の教養とされ、各地の大名たちはお抱えの連歌師を置くこともあったようなので、その限りにおいては、決して長晟が特殊であるとはいえません。しかしながら、長晟の連歌エピソードは、天神坊のみにとどまらないのです。

同じく『知新集』「天満宮」の項に面白い記述があります。この「天満宮」は、現在も広島市東区山根町にある尾長天満宮を指します。尾長天満宮の由緒は、延喜元年(901)、菅原道真が大宰府に左遷される道中、尾長山麓に船を寄せ、山を登り休憩をした場所に建てられた小祠からはじまったとされています。しかし、その後数百年を経た江戸時代のはじめには、「御社も有か無かの如くにして知る人さへもなかりし」とあるように、山中へ至る道の不便さからか、その存在は半ば忘れられ、詣でる人も少なくなっていたようです。

『知新集』には、尾長天満宮の中興として、松尾甚助忠正という人物の話が記されています。この人は、もとは京都の生まれで、寛永の頃広島にやってきたようです。忠正は連歌が得意で、しばしば長晟に呼ばれては、共に連歌に興じていたとされている、長晟にとっては親しい連歌仲間の一人でした。忠正は、京都にいた頃からたいへん天神信仰に厚い人物で、広島に来てからも毎日、京都の北野天満宮よなほいを遙拝していたほどでした。そんななか忠正は、尾長山中にある天神社を人里近く祀るべしとの夢告を得ます。これにより、忠正が大願主となり、寛永17年(1640)社殿が落成。尾長山麓の現在の地に遷座がなされた、ということです。

このことについて、『知新集』には長晟の直接的な関与は記されませんが、『広島市史 社寺誌』「尾長天満宮」の項には、「藩主長晟に請ひて」と、長晟の関与が示唆されています。また、『知新集』に尾長天満宮の遷座について「国家の守り」となること

が強調されていること、浅野家5代藩主の吉長や同6代藩主の宗恒むねつねらの御参社が記されることから、長晟や浅野家の何らかの関与があっても不思議ではありません。



現在の尾長天満宮

## 連歌と天神信仰

これらのことからわかるのは、長晟は連歌上手な人間を他国から呼び寄せて城下に留め置き、共に連歌興行するのはもちろん、住持の職を与えるなどして厚遇していた、ということです。さらには、いずれのパターンでも、長晟の連歌仲間が、一時衰退していた天神社(天満宮)を再興するという功績を上げています。

この背景には、天神信仰と連歌の深い結びつきがあります。天神社の祭神である菅原道真は、広く「学問の神」として知られていますが、道真は幼少期より詩文に優れた才能を発揮したことから、連歌を志す人々からは「連歌の守り神」としても信仰されていました。故に、連歌が大好きな長晟は、その守り神である天神様を深く信仰していたのでしょう。長晟のおかげで、城下の二つの天神社が再び元気を取り戻したことは、城下の信仰を考えるうえでも興味深い事例です。

今年は、天神坊への連歌百韻奉納からちょうど400年にあたります。400年前、浅野長晟という連歌好きのお殿様が広島城にいたのだなあ…と、うっすら覚えておいていただけるとうれしいです。

(吉田 文)

### 参考文献

- ・『新修広島市史 第六巻 資料編その一』 広島市 1959年
- ・『広島市史 社寺誌』 広島市役所 1925年 ※1972年名著出版による復刻版

# コラムー江戸時代と健康ー

江戸時代の人々が、火事や地震よりも恐れた伝染病。中でも、天然痘・はしか・水ぼうそう、そして、流行性の熱疾患やコレラなどは、特に恐れられた流行病でした。医療や防疫体制が十分でなかった当時、こうした流行病を封じ込めることは難しく、広島藩も、幾度もその災禍に見舞われました。

中でも、コレラは文政5年(1822)、安政5年(1859)・6年(1860)、文久2年(1862)の4回流行しているといわれ、いずれも外国から長崎へ入り、九州・西国を経て全国へ流行しました。その被害は甚大であったようで、例えば、安政5年(1859)に大流行したコレラの死者は全国で数十万人ともいわれています。同年8月には広島城下でも猛威をふるい、中には、家族が次々と亡くなり、空き家状態になってしまう家もあったほど、多くの死者を出しました。その後、秋になっても勢いはおさまらず、佐伯郡草津村(現在の広島市西区草津)では大半が死亡したと伝えられています。こうした流行病から人々を救済するため、同年8月19日広島藩主浅野慶熾は城内三の丸の稻荷社で徐疫祈禱を執行させ、城下各町人も諸神社で祈禱を行いました。領内には、幕府が配布したコレラ予防法が布達され、身体を温めることや芳香散という薬を用いることなどが紹介されたようです。

はしかは、数十年に一度は大流行し、多くの死者を出しました。流行の年には「はしか絵」といわれる錦絵が絵師たちによって描かれ、その予防や養生法などが書き添えられました。特に文久2年(1862)は、広島藩も含め全国で大流行し、数多くの「はしか絵」が刊行されています。

病気の予防法や、病状を軽くするためのおまじない、治療法や病後の養生法などが記された刊行物は、人々ができる範囲で病に対処する方法や心構えを伝えるものでした。恐ろしい病気から身を守る手段として、神仏の力や民間療法に頼らざるをえない時代。人々は、平癒の願いをこめて、祈禱を行ったほか、患部と撫仏を交互になでたり、疫病退治の絵を護符として貼るなどして、怪我や病氣などの厄災を退け、健やかな暮らしができるよう願ったようです。

正徳2年(1712)に福岡藩の儒学者貝原益軒によって著された『養生訓』は、健康で健やかな人生を送るための心がけや方法が書かれた指南書で、当時、多くの人に愛読されました。その中には、「古人、禍は口よりいで、病は口より入るといへり。口の出しいれ、常に慎むべし。」(昔の人は、災いは口から出て、病は口から入るといふから、口から出すものや入るものには気を付けるべきだ。)など、現代にも通じるような多くの教訓が記されています。これらのことは、心がけ次第ですぐに実践できるものも多く、私たちも参考にできることがあるかもしれませんね。江戸時代も今も、できる範囲で日々健康を心がけたり、少しでも長生きしたいという願いは、変わらないようです。(正連山 恵)



孟齋芳虎「麻疹養生之傳」  
国立国会図書館デジタルコレクションより

#### 参考文献等

- ・『益軒先生養生訓』貝原益軒原著、良書刊行会編 1916年
- ・『広島県史 近世2』広島県 1984年
- ・『大江戸ものしり図鑑』花咲一男監修、主婦と生活社 2009年
- ・『広島県立文書館資料集9 村上家乗 安政五年・六年』広島県立文書館 2016年
- ・くすりの博物館(2020-040-25) <http://www.eisai.co.jp/museum/index.html>

しろうや  
!  
広島城

#### 編集・発行

公益財団法人広島市文化財団  
広島城

〒730-0011  
広島市中区基町21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

令和3年6月10日発行

#### 広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人370円(280円) 中学生以下無料  
高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)

( )内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～12月31日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>